

ふたつの手

夕立ふった夏の日

大つぶ涙の 水たまり  
かわずピチャピチャ

雨のなか

夕やけ空の雨あがり

紅く流れる ちぎれ雲  
からすがつまんで

飛んでゆく

君とふたりで手をつなぎ

ぬれたながい 草の道  
おうちへいそぐ

ふたつの手

## お別れのあいさつ

北国の秋の夕ぐれのことです。

夕日の淡い光をあびて、

東の山の斜面に、

大きなカエデの木が一本立っていました。

カエデの木の枝には、

ぼつんと一つ残った柿の実のように、

小さなサルがとまっています。

子ザルは頭をヒョイともちあげて、

うっとりとして西の空をみているのです。

赤くそまつた細長い雲がゆつくりと流れ、  
お日さまにからまります。

紫や鼠色の雲が、  
ときたまその中にわり込みます。

すると、どうでしょう。

お日さまは、西の山にどんどんと落ちていきます。  
子ザルは悲しくてしかたありません。

きれいな夕焼けをつくるお日さま、

どうして山の中に落ちてしまうのだろう。

赤い雲さんは、

どうしてお日さまを引きとめないのだろう。

そう思うと、夕日のかげらが映った子ザルの瞳から、

涙がポロポロこぼれました。

その涙の粒は、

カエデの木に付いている手にたまりました。  
すると、

みるみるうちに手は紅くなり、

風の中をヒラヒラと舞い落ち、

沈んでいくお日さまに、

お別れのあいさつをするのです。

## 夜の空

夜の空に浮いている、あのまるい月。

もしも、わたしにちいさな子どもがいたら、  
こう言ってやる。

「あれはねえ、夜の天井に開いたふし穴さ。

あの穴の向こうには夜がないんだ」

そうしたら子どもは、星を指さして、  
こう聞きかえず。

「それじゃあ、あの、ちっちゃなつぶつぶは、なに」

「あれもふし穴さ。ちっちゃいけどね」

「でも、ちっちゃいふし穴。うごいて消えちゃったよ」

わたしは一瞬たじろいだが、気をとりなおして、  
こう言った。

「うちの天井のふし穴だって、おまえが動けばどうなる」

「……？」

「ふし穴が動いたようにみえるだろ。それとおんなじさ」

「……？」 どうして消えちゃったの」

「見えなくなつたのさ。

夜の天井の上で、だけれが、ふたをしたんだ」

なんだか、わけのわからない話しである。

「さあ、坊、もう寝よう」

「うん」

夜の空はしんとして、

小ささまざまなふし穴が、

キラキラとまたたいている。